

巻頭言

フジコー技報第2号によせて

NKK社長

三好 俊吉
Syunkichi Miyoshi

(株)フジコー（当時の富士工業所）とNKKとの出会いは、昭和37年、当社京浜地区の川崎製鉄所で、鑄型修理を依頼したのが最初だと記憶している。

これを機に、翌昭和38年には、当社が新鋭薄板一貫製鉄所として建設した水江製鉄所の鑄型修理を、さらに、39年には鶴見製鉄所の鑄型修理をそれぞれお願いすることとなった。また、昭和41年、福山製鉄所製鋼工場の稼働にあたっては、全ての鑄型修理をお任せするなど、ほぼ5年の間に、当社の全ての鑄型修理をお願いすることとなった。自動化・省力化等、この間における、フジコーさんの修理技術の開発はめざましく、発注元の我々も大いにその恩恵を受けてきたところである。

その後、連鑄化の進展に伴って、鑄型修理がほとんどなくなったが、このような経営環境の大きな変化に対するフジコーさんの変容ぶりは極めて印象的であった。製鉄所のロール補修、保全整備、あるいは、予備品の補修延命・補修再生といった分野を開拓し、見事に脱鑄型修理を達成されたのである。これは、まさに、技術立脚型の企業の面目躍如たるものであった。

日本経済は今、大きな転換点を迎えている。長引く不況と相俟って、あたかも袋小路に入った感さえある。

それでも、ここにきて、ようやく大底を打ったのではないかとの観測が出され、業種によっては、景気回復の微かな手ごたえを感じている向きもあるようだ。

しかしながら、鉄鋼業界においては先行きまだまだ不透明である。企業再建のためのリストラ計画も

緒についたばかりであり、目の前には課題山積といわざるをえない状況である。

一方、急激な円高が進み、輸出採算ラインが大きく割れてしまった今、製造業における海外への生産シフトが加速化し、産業の空洞化が、どんどん進むのではないかと懸念されている。

このように極めて厳しい現況であるが、今後とも、日本経済の屋台骨を支えていくのは、間違いなく「製造業」であると考え。言い換えれば、日本経済の行く末は、ユニークな最先端技術を、日本独自に、いかに開発・応用出来るかという点にかかっていると私は確信する。

言うまでもなく、フジコーさんは、技術指向の極めて強い会社である。「溶接技術」を、ベースとなる技術分野として明確に位置づけ、それを核として、時代の要求に応じた新しい分野に、常に挑戦されている。この飽くなき探求心こそ、日本経済を支える原動力であると思う。

ところで、「驚異の秘境……」「知られざる魔境……」などと銘うち、21世紀を目前にした今も、現代の文明圏の外で、原始的な生活様式をもって逞しく生きている人々の姿をテレビに映しだしていることがある。

様々な文化を吸収し、何のためらいもなく、豊かな(?)物質文明に浴している我々にとって、画面を通して伝えられる彼らの生活ぶりは、極めて異様に映る。我々は、何と恵まれた境遇にいることかと、知らず知らずに感じてしまう。

しかしながら一方で、生き生きとした彼らの眼の輝きをみつめていると、「われわれは、適正レベル

を越えた消費社会を創りだしてしまっただけではないか」との反省の念が頭をもたげてくる。現実問題として、今、地球が病んでいる。

われわれは、地球と人類の共生をはかるといふ大命題に、責任をもって、真剣に取り組まねばならない大事な時期を迎えている。避けて通ることの出来ない人類共通のこの課題を解決する鍵は、現代を生きるわれわれがもつべき哲学とさらなる技術革新、それも、単に従来の延長ではない技術革新にあると言えよう。

調和のとれた豊かな社会を創造するためにも、よってたつところは「技術開発」であると考え。そしてまた、その技術を駆使する者の哲学とそれを迎える社会の眼が厳しく問われなければならない。

この観点に立ってみると、フジコーさんの「ものを大切にする」という理念は、極めて将来性のある卓見である。「修理再生」というといかにも古めかしいが、字づらの古さとは全く逆に、リサイクル技術という新しいものが見えてくる。

また、単純に価値を付加するにとどまらず、設計から製作、据付、さらには、保全までトータルとしての責任を果たそうとされている姿には、フジコーさんの哲学が見える。

今後とも、この理念にそって、特異性のある優れた技術を開発し、なくてはならない企業として大いに発展されるものと期待している。

略 歴 書

三 好 俊 吉

昭和4年3月16日（東京都）

出身地（主たる成育地）東京都

【学 歴】

昭和26年3月 東京大学第一工学部冶金学科卒業

【職 歴】

昭和26年4月 日本鋼管株式会社入社
同 46年1月 福山製鉄所次長
同 47年7月 同 製鋼工場長
同 50年7月 同 製鋼部長
同 52年7月 製鉄エンジニアリング部総合計画室長
同 54年7月 製鉄エンジニアリング部長
同 57年6月 取締役就任
同 7月 第二重工本部製鉄エンジニアリング部長委嘱
シカルツア電気炉プロジェクトマネージャー（事務取扱）
同 58年7月 技術研究所長委嘱
同 59年4月 中央研究所長委嘱
同 60年6月 常務取締役就任
同 7月 福山製鉄所長委嘱
同 63年6月 代表取締役専務取締役就任
同 7月 新材料事業部長委嘱
平成2年6月 代表取締役副社長就任
同 7月 技術分野全般につき社長を補佐
同 4年6月 代表取締役社長就任
現在に至る